

パーソナリティ特性を起点としたロールフルネスの生起モデルと自尊感情との関連

加藤 大樹 (金城学院大学 人間科学部, daiki-k@kinjo-u.ac.jp)

榊原 葵 (金城学院大学 大学院人間生活学研究科, 17871@kinjo-u.ac.jp)

鈴木 美樹江 (愛知教育大学 心理講座, s-mikie@aeu.ac.jp)

浅井 継悟 (北海道教育大学 大学院教育学研究科, asai.keigo@k.hokkyodai.ac.jp)

酒井 麻紀子 (愛知教育大学 心理講座, s-makiko@aeu.ac.jp)

The causal relationships among personality, role satisfaction, and self-esteem

Daiki Kato (College of Human Sciences, Kinjo Gakuin University, Japan)

Aoi Sakakibara (Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University, Japan)

Mikie Suzuki (Department of Psychology, Aichi University of Education, Japan)

Keigo Asai (Graduate School of Education, Hokkaido University of Education, Japan)

Makiko Sakai (Department of Psychology, Aichi University of Education, Japan)

Abstract

The purpose of this study is to investigate the causal relationships among personality, role satisfaction, and self-esteem. Rolefulness is defined as the continuous sense of role satisfaction in our daily lives and includes two sub-factors: social and internal rolefulness. The Big Five model was used as a measurement tool of personality in this study. The Big Five model includes five subfactors: extraversion, openness, agreeableness, conscientiousness, and neuroticism. In this study, the data of 617 Japanese high school students were analyzed. The results of the analysis revealed that social and internal rolefulness converged into rolefulness as the latent variable. Moreover, extraversion, openness, agreeableness, and conscientiousness increased rolefulness and facilitated self-esteem. The results of this study revealed a process that indicates how individual personality characteristics influence the promotion of rolefulness and the development of self-esteem. Furthermore, the results of this study suggested that psychological characteristics specific to the age of high school students may influence this process.

Key words

role satisfaction, personality, self-esteem, identity, university students

1. 問題と目的

1.1 ロールフルネスと関連要因

ロールフルネスとは、日常生活の中で感じる持続的な役割満足感をあらわす心理学的概念であり、社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスの2因子によって構成される (Kato & Suzuki, 2018)。以下、本論文では、役割満足感 (role satisfaction) について、ロールフルネスという用語を用いて論じる。社会的ロールフルネスは、対人場面において自身が担う役割を通して得られる満足感や達成感に関わるものであり、「自分の長所を社会の中で生かすことができている」、「所属する集団の中に自分の役割がある」などの項目によって構成されている。一方、内的ロールフルネスは社会的役割を通して個人の中に内在化された自信や個性への気づきと満足感をあらわし、「役割によって自分らしさを実感できる」、「役割によって自分に自信が持てる」などの項目が含まれる。

これまでの研究によって、パーソナリティとロールフルネスの関連 (Sakakibara & Kato, 2021) や、ロールフル

ネスの獲得が自尊感情の形成を促進すること (加藤・鈴木, 2021) が示されてきた。しかし、個々のパーソナリティ特性がロールフルネスの促進にどのように作用し、ロールフルネスが自尊感情の形成をどのように媒介するかを一連の流れとして検討する研究は未だ行われていない。そこで、本研究では、パーソナリティ特性がロールフルネスを媒介し、自尊感情の形成を促すという包括的モデルを提唱し、その妥当性を検討することを目的とする。

パーソナリティとロールフルネスの関連については、HEXACO モデルを用いた検討が行われている (Sakakibara & Kato, 2021)。HEXACO モデル (Ashton & Lee, 2007) は、心理学における主要なパーソナリティ理論である Big Five モデル (Goldberg, 1992) をもとに、新たな因子を加えたものである。Big Five モデルは、個人のパーソナリティを個々のパーソナリティ特性の総体としてとらえる特性論的な考え方に基づき開発されたものであり、「開放性」、「誠実性」、「外向性」、「協調性」、「神経症傾向」の5因子から個人のパーソナリティ傾向を測定する。HEXACO モデルは、この5因子に「正直さ・謙虚さ」因子を加えたものである。Sakakibara & Kato (2021) では、女子大学生を対象とした研究で、社会的ロールフルネス・内的ロールフルネスともに「外向性」と「開放性」がポジティブ

な影響を与えていることが示された。このことから、Big Five モデルにおける主要 5 因子は、ロールフルネスの形成過程において重要なはたらきを担っていると考えられる。

また、Big Five モデルにおけるパーソナリティ因子は、ロールフルネスを媒介しながら様々な他の心理学的要因に影響を与える可能性も有している。たとえば、Hagihara & Kato (2018) は、Big Five モデルとレジリエンスとの関連を示している。レジリエンスは、精神的回復力をあらわす心理学的概念である。中北 (2024) は、適切な居場所感をもつことがレジリエンスを促進することを示している。居場所感とは近年着目されている心理学的概念の 1 つであり、「本来感」、「安心感」、「被受容感」、「役割感」の 4 つの要素から構成される (則定, 2008)。この中の役割感とは、ロールフルネスとたいへん関わりが強いものである。他者との関係性において、自身の役割に気づき、そこから自信を得ることは、ロールフルネスの促進において不可欠な要素である。レジリエンスのような私たちの心理的健康を支える要素の形成や維持には、個人のパーソナリティ特性が影響を与えていることが明らかになっているが、これらの研究が示すように、ロールフルネスは両者の関係をつなぐ媒介要因として機能している可能性がある。このような観点のもと、本研究では、ロールフルネスがパーソナリティと他の心理学的概念との関係性を媒介するプロセスを明らかにしていく。

自尊感情もまた、心理的健康の基盤となる重要な要素である。私たちのロールフルネスが自尊感情にポジティブな影響を与えることは、これまでに明らかにされている。特に、アイデンティティの形成が発達課題となる高校生の時期においては、ロールフルネスが自尊感情を促進し、それがアイデンティティの形成にポジティブな影響を与えていることが示されている (加藤・鈴木, 2021)。重要な心理的要素の 1 つとして注目されている。たとえば、自尊感情は、ストレスがアイデンティティに与える影響を緩和する媒介因子としてはたらくことが認められている (de Man, Harvey, Ward, & Benoit, 2008)。また、中間 (2013) は、ローカスオブコントロールにおける内的統制と自尊感情の間に有意な相関があることを示している。Rotter (1966) におけるローカスオブコントロールの理論に基づく、内的統制とは、行動や認知の評価基準が自身の内側に確立しており、自分の行動がその結果を規定しているという確かな自信をもった状態を指す。対人関係や社会的経験を通して、新たな認知的枠組みを獲得し、自信や自分らしさを身につけることは、ロールフルネスの成長においても中核をなすプロセスである。このことから、健全なロールフルネスを育むことは自尊感情の促進にポジティブな影響を与えることが期待される。

1.2 本研究における仮説モデル

本研究では、パーソナリティ特性がロールフルネスを媒介し、自尊感情の形成を促すという包括的な仮説モデ

ルを提唱し、その妥当性を検討する。なお、本研究では高校生を対象に調査を行う。高校生は、ある程度の自由をもちつつも、学級という与えられた環境での適応が主となることに加え、卒業後就職、進学など卒業後に多様な環境に身を置くことになる学校段階である。また、高校時代のロールフルネスは大学時代のストレス関連成長との関連が指摘されていることから (浅井・鈴木・酒井・加藤, 印刷中)、ロールフルネスを捉える上では重要な学校段階であると考えられるため、本研究ではこの年代に焦点を当てた検討を行う。

2. 方法

2.1 対象

715 名の高校生 (男性 326 名、女性 389 名、1 年生 359 名、2 年生 356 名) を調査対象とした。データに欠損があったものを除外し、最終的に 617 名分のデータを分析対象とした。サンプリングの妥当性に配慮し、調査対象とした高校は、平均程度の偏差値帯の公立高校とした。学区における文化・経済的な特殊性はない。多くの生徒が大学進学を目指し、運動部や文化部などの部活動にも取り組んでいる。

2.2 使用尺度

パーソナリティを測定する尺度として、小塩・阿部・カトローニ (2012) による日本語版 Ten-Item Personality Inventory (TIPI-J) を用いた。「外向性」、「協調性」、「勤勉性」、「神経症傾向」、「開放性」の 5 因子を用いて、「全く違うと思う」から「強くそう思う」の 7 件法でパーソナリティを測定する尺度であり、全 10 項目で構成されている。

ロールフルネスの測定には、Kato & Suzuki (2018) のロールフルネス尺度を用いた。原版は項目内容が英語で表記されているが、加藤・鈴木 (2025) による日本語表記の項目を使用した。「社会的ロールフルネス」と「内的ロールフルネス」の 2 因子全 7 項目を用いて「あてはまらない」から「あてはまる」の 5 件法で測定する。

自尊感情の測定には、KINDL (Ravens-Sieberger & Bullinger, 1998a; 1998b) を採用した。中学生版 QOL 尺度 (松崎・根本・柴田, 2007) として日本語訳されたものを使用した。

3. 結果

統計的分析には R version 4.2.1 を用いた。使用した尺度の信頼性を検討した結果、ロールフルネス尺度において十分な信頼性が確認された (社会的ロールフルネス ($\alpha = .87$)、内的ロールフルネス ($\alpha = .89$))。自尊感情 ($\alpha = .87$) においても十分な信頼性が確認された。TIPI-J については各因子 2 項目から構成されるため、先行研究にならない、各因子における項目間相関を求めた (「外向性」($r = .36$)、「協調性」($r = .11$)、「勤勉性」($r = .24$)、「神経症傾向」($r = .11$)、「開放性」($r = .09$))。高い項目間相関は認められなかったが、先行研究 (小塩他, 2012) によって十分な内容的妥当性が認められていることを考慮し、原

版どおりの項目を採用した。各尺度の相関を検討した結果、TIPI-Jの「外向性」、「協調性」、「勤勉性」、「開放性」とロールフルネスの間に弱い正の相関が認められた。ロールフルネスと自尊感情の間にも弱い正の相関が認められた。

パーソナリティがロールフルネスに影響を与え、それがさらに自尊感情とアイデンティティに影響を与えるという仮説に基づきモデルを構築した。構造方程式モデリングを用いてモデルの妥当性が検討された。「神経症傾向」に関してはロールフルネスと自尊感情への有意な影響が認められなかったため、モデルから除外した。神経症傾向を含めたモデルでは、モデル全体の適合度も十分な値は得られなかった($CFI = 0.873$, $TLI = 0.763$, $RMSEA = 0.075$, $SRMR = 0.077$)。分析の結果、神経症傾向を除外した図1に示すモデルにおいて一定の適合度が認められた($CFI = 0.976$, $TLI = 0.945$, $RMSEA = 0.053$, $SRMR = 0.032$)。

まず、「社会的ロールフルネス」と「内的ロールフルネス」は、潜在変数として「ロールフルネス」に収束することが認められた。パーソナリティ傾向における「外向性」、「協調性」、「勤勉性」、「開放性」がロールフルネスを有意に促進していることが示された。ロールフルネスは自尊感情の形成を促進していることが示された。

4. 考察

分析の結果から、「外向性」、「協調性」、「勤勉性」、「開放性」がロールフルネスを促進し、それがさらに自尊感情の形成を促進していることが示された。パーソナリティ特性がロールフルネスを媒介し、自尊感情の形成を促すという仮説は支持されたと考えられる。

パーソナリティとロールフルネスの関連に関しては、HEXACOモデルを用いた検討(Sakakibara & Kato, 2021)の結果、社会的・内的ロールフルネスともに、外向性と開放性がポジティブな影響を与えていることが示されている。これは本研究の結果とも共通するところである。

本研究で用いたTIPI-Jにおける外向性には「活発、外向的」という要素が含まれ、開放性には「新しいことが好き」という要素が含まれている。外向性については、対人的な不安を軽減させることが知られている(Bienvenu, Samuels, Costa, Reti, Eaton, & Nestadt, 2004)。このように

外向性は対人的な関心の高さをあらわす指標である。これに対し、開放性はものごとや新規場面に対する関心の高さをあらわすものであるが、対人関係にも影響を及ぼすことが認められている。たとえば、外向性と開放性は、ともに対人関係における賞賛獲得欲求とポジティブな関連を持つことが示されている(吉澤, 2020)。また、小林(2006)は、成功時・失敗時の自己呈示行動とパーソナリティの関連を調査した結果、外向性が高いほど、成功時には親しみやすさをアピールし、失敗時には自分の前向きさをアピールしていることを明らかにしている。同時に、開放性が高いほど、成功時に自分の能力の高さを多くアピールしていることが示された。これらの研究が示すように、外向性や開放性の高さは、日常の対人関係において、他者に対して積極的に働きかける原動力にもなっていると考えられ、このような特性が役割意識への関心の高さにつながり、ロールフルネスを促進しているのではないだろうか。

協調性と誠実性については、先行研究におけるロールフルネスとの関連の検討においては有意な影響関係は認められなかった(Sakakibara & Kato, 2021)。しかし、本研究において、自尊感情を新たに加えたモデルでは、協調性と誠実性がロールフルネスの促進にポジティブな影響を与えていることが示された。Big Fiveにおける誠実性には、真面目さや勤勉性の他に、リーダーシップに関わる要素も含まれている。松山・白築・中山(2023)は、サーバント・リーダーシップとBig Fiveの誠実性の間に有意な関連があることを示している。中山(2016)は、サーバント・リーダーシップ尺度を構成する項目として、「私の上司は、部下の意見・提案に真摯に耳を傾け、積極的に取り入れている」「私の上司は、部下全員に対し、いつも感謝の念を抱いている」などを採用している。このように他者に対して積極的に関わり、共感性を示す姿勢は、所属する組織や仲間集団において自分の役割を意識し、そこから自分らしさや自信を獲得することにつながると考えられる。このようなプロセスにより、誠実性がロールフルネスの促進に関与しているのではないだろうか。

協調性は、他者と調和して協力してものごとに取り組むパーソナリティ特性である。役割意識との関連も強い要素であることから、ロールフルネスに与える影響も強

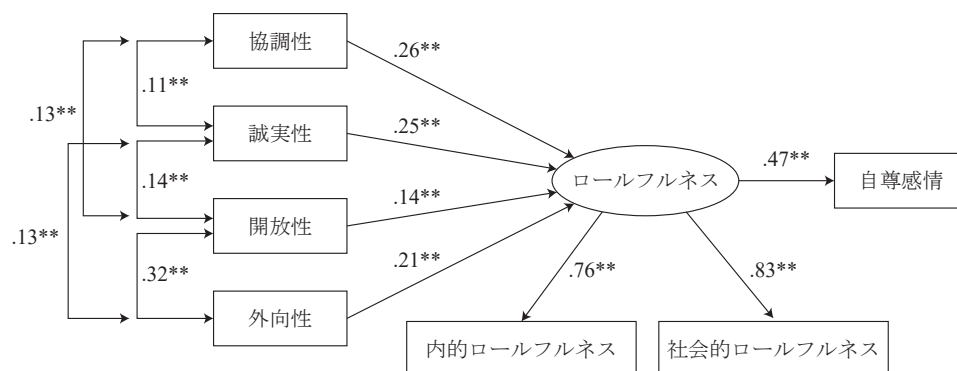


図1：パーソナリティ・ロールフルネス・自尊感情の関連

いと考えられる。しかし、大学生を対象とした Sakakibara & Kato (2021) では、協調性からロールフルネスに対して直接的な影響は認められなかった。本研究では両者の間に有意なポジティブな影響関係が見られたことから、両者の関係性には対象の年代や他の変数の影響が関与している可能性がある。菊野・菊野・李・山田 (2018) は、高校生を対象として理想の教師像の調査をした結果、協調性の高い生徒では教師に対して M 機能（人間関係の調整機能）を期待しやすい傾向が示された。このことは、高校生という年代が対人関係に敏感な世代であり、協調性や環境への適応が重要な課題であることを示しているといえよう。

さらにロールフルネスは、パーソナリティと自尊感情をつなぐ媒介要因として、自尊感情の促進にポジティブな影響を与えていることが示された。本研究では、社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスがロールフルネスという 1 つの潜在変数にまとまるモデルを採用している。そのため、社会的・内的ロールフルネスの相互の関連を考慮しながら、総合的に自尊感情への影響を考察する必要がある。加藤・鈴木 (2021) では、ロールフルネス、自尊感情、アイデンティティの三者の関係性を検討している。ここでは、社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスを 1 つにまとめるモデルよりも、個別にとらえるモデルの方が適合度が高く、社会的ロールフルネスが内的ロールフルネスを促進し、それがさらに自尊感情やアイデンティティを促進するという結果が示された。このことには、従属変数としてアイデンティティを想定していることが大きく関わっていると考えられる。アイデンティティの形成は青年期の重要な課題であり、その形成プロセスにおいては、具体的な対人関係や体験を積み重ね、それを自信として内在化していくことが重要である。このような理由から、アイデンティティへの影響を考える場合、まず、具体的な体験から社会的ロールフルネスを育み、それを基盤に内的ロールフルネスを高めるという順序が必要なのではないだろうか。

一方、本研究では、パーソナリティと自尊感情の関係を明らかにするため、媒介変数としてのロールフルネスの機能に着目した。両者をつなぐ媒体としての機能に着目すると、社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスを個別の存在としてとらえるのではなく、1 つの総体としてとらえることの重要性が明るみになったといえるのではない。相田・上野・日高・北村 (2024) は、中学生と高校生を対象にした研究により、協働性と自尊感情の間の有意な関連を明らかにしている。協働性には、「他の人の考えや意見の違いを受け入れ、話し合う」、「他の人の意見や考えを、自分自身の考えや意見に活かす」という要素が含まれる。協働性は、学校場面における協働作業や協働学習において個々の役割を意識する上で重要な要素であると考えられる。そして、「話し合う」などの具体的な行動は社会的ロールフルネスと関わり、「他者の考えを自分に活かす」という要素は経験を内在化して個性として活かすという点において内的ロールフルネスと関

わると考えられる。このように、高校生の年代においては、学校生活における対人関係において様々な体験をすることにより、社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスの両方を身につけることが自尊感情の促進にとって重要であるのではないだろうか。また、高校生にとっては、社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスがまだ十分に分化していない可能性もある。社会的ロールフルネスと内的ロールフルネスのどちらか一方でなく、両者をバランスよく身につけ、適切なレディネスを備えることが、高校生の自尊感情の健全な成長にとって大切であると考えられる。

本研究の結果から、個人のパーソナリティ特性がどのようにロールフルネスの促進に影響を与え、自尊感情を育むかを示すプロセスが明らかになった。同時に、このプロセスには、高校生という年代特有の心理的特性が影響している可能性も示唆された。高校生が将来を考える上での進路指導や、心理教育などの場面で本研究の結果の応用が期待される。今後は、様々な年代を対象に、ロールフルネスと他の心理特性の関連を明らかにしていきたい。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP22K03099（研究代表者：鈴木美樹江）の助成を受けた。

引用文献

- 相田直樹・上野雄己・日高一郎・北村友人 (2024). 協働学習参加に協働性と自尊感情はどのように関連するか. 日本教育工学会論文誌, 28, pp. 1-4.
- 浅井継悟・鈴木美樹江・酒井麻紀子・加藤大樹 (印刷中). 高校 2 年生から大学時にかけての学校不適応感の変化と大学時のストレス関連成長との関連—回想法を用いた調査から—, 学校メンタルヘルス.
- Ashton, M. C. & Lee, K. (2007). Empirical, theoretical, and practical advantages of the HEXACO model of personality structure. *Personality and Social Psychology Review*, 11, pp. 150-166.
- Bienvenu, O. J., Samuels, J. F., Costa, P. T., Reti, I. M., Eaton, W. W., & Nestadt, G. (2004). Anxiety and depressive disorders and the five-factor model of personality: A higher-and lower-order personality trait investigation in a community sample. *Depression and Anxiety*, 20, pp. 92-97.
- de Man, A. F., Harvey, S., Ward, S.-L., & Benoît, A. (2008). Ego-identity, self-esteem, and psychological stress in adolescents who attend school and work part-time. *Individual Differences Research*, 6 (4-A), pp. 245-252.
- Goldberg, L. R. (1992). The development of markers for the Big-Five factor structure. *Psychological Assessment*, 4 (1), 26-42.
- Hagihara, M. & Kato, D. (2018). HEXACO personality traits and resilience among Japanese female university students. *College Student Journal*, 52 (3), pp. 368-372.

- Kato, D. & Suzuki, M. (2018). Rolefulness: Social and internal sense of role satisfaction. *Education*, 138 (3), pp. 257-263.
- 加藤大樹・鈴木美樹江 (2021). 青年期のアイデンティティ形成におけるロールフルネスの影響. 金城学院大学論集人文科学編, 18 (1), pp. 1-7.
- 加藤大樹・鈴木美樹江 (2025). ロールフルネス—役割満足感の心理学—. ナカニシヤ出版.
- 菊野春雄・菊野雄一郎・李琦・山田悟史 (2018). 教師を目指す学生の理想的教師像に及ぼす性格的要因. 大阪総合保育大学紀要, 12, pp. 63-72.
- 小林知博 (2006). 成功・失敗時の自己呈示とリスク重要度, 性格特性, 社会的適応の関係性. 青山学院女子短期大学紀要, 60, pp. 69-86.
- 松崎くみ子・根本芳子・柴田玲子 (2007). 日本における「中学生版 QOL 尺度」の検討. 日本小児科学会雑誌, 111 (11), pp. 1404-1410.
- 松山一紀・白築茉耶・中山敬介 (2023). サーバント・リーダーシップと性格特性因子ビッグファイブが, フォロワーシップ行動に与える影響. 評論・社会科学, 145, pp. 19-38.
- 中北和 (2024). 女子大学生における基本的居場所感とレジリエンスの関連. 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集, 24, pp. 11-18.
- 中間玲子 (2013). 自尊感情と心理的健康との関連再考—「恩恵享受的自己感」の概念提起—. 教育心理学研究, 61 (4), pp. 374-386.
- 中山敬介 (2016). 日本の企業組織に有効なサーバント・リーダーシップ特性の特定化. 近畿大学商学論究, 15 (1), pp. 55-73.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化. カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 小塩真司・阿部晋吾・Cutrone, P. (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21 (1), pp. 40-52.
- Ravens-Sieberer, U. & Bullinger, M. (1998a). Assessing health related quality of life in chronically ill children with the German KINDL: First psychometric and content-analytical results. *Quality of Life Research*, 4 (7), pp. 399-407.
- Ravens-Sieberer, U. & Bullinger, M. (1998b). News from the KINDL-Questionnaire: A new version for adolescents. *Quality of Life Research*, 7, p. 653.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs: General and Applied*, 80, pp. 1-28.
- Sakakibara, A. & Kato, D. (2021). Relationship between HEXACO Personality Traits and Rolefulness. *Journal of Psychology & Behavior Research*, 3 (2), pp. 26-30.
- 吉澤英里 (2020). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と Big Five の関連について. 環太平洋大学研究紀要, 15, pp. 37-41.

受稿日: 2025 年 2 月 15 日
 受理日: 2025 年 3 月 24 日
 発行日: 2025 年 6 月 30 日

Copyright © 2025 Society for Human Environmental Studies



This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-Non-Commercial-NoDerivatives 4.0 International] license.



<https://doi.org/10.4189/shes.23.31>